保育場面において幼児が使用する注意喚起行動の行動目録

○廣瀬翔平¹・園田和子^{2#}・園田裕紹^{3#}・矢藤優子¹

(¹立命館大学総合心理学部・²せつつ遊育園・³とりかいひがし遊育園)

キーワード：注意喚起行動，保育場面，行動目録

An Ethogram of Children's Attention-Seeking Behaviors at the nursery school

Shohei HIROSE¹, Kazuko SONODA^{2#}, Hiroaki SONODA^{3#}, Yuko YATO¹

(¹College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University, ²Setsu Yuikuen, ³Torikaihigashi Yuikuen)

Key Words: Attention-Seeking Behaviors, Nursery school, Ethogram

目 的

子どもは日常的に大人の注意を引こうと、指差しをしたり、腕をひっぱったりするような行動、あるいは「みて」や「みてて」といった発話を行う。このような他者の注目を得ようとする行動や発話を注意喚起行動あるいは注意請求行動 (Attention-Seeking Behaviors 以下、A-S 行動) という。

この A-S 行動について、集団生活場面での事例観察による先行研究では、共感的機能、方略的機能、媒介的機能の3つが提示されており (福崎, 2006), 子どもが集団生活への適応に重要な役割を果たすことが示されている。

しかし、幼児がどのような方法で A-S 行動を行うのか (例えば、見せたいものを目の前に提示する、手をひっぱり注意を引くなど) という行動レパトリーの側面については研究が十分になされているとはいえない。そこで本研究は、集団生活場面における幼児の観察を通して、幼児が行う A-S 行動の行動目録の作成することを目的とする。

方 法

観察対象者 A 市内にある認定こども園の3歳児クラス35名と4歳児クラス34名の幼児と保育者を観察対象とした。
観察期間 20xx 年の4月～5月に週1回程度 (6回), 朝の8:00～17:00頃まで保育場面に参与し、観察を行なった。園庭での自由遊びは、3歳児クラス・4歳児クラス・5歳児クラスが合同で遊んでいるため、3歳児クラス・4歳児クラス両方の幼児を対象に観察し、その他のクラスごとの活動を行う時間帯についてはそれぞれのクラスに参与する日を決め、観察機会が均等になるよう (各3回ずつ) に観察を行なった。なお、観察者は前年の2月より週1回程度 (5回), 同様の時間帯で保育場面に参与し、幼児と関わりをもち、園生活になじむようラポール形成を行なった。

観察方法 観察は、行動サンプリングの連続記録で行なった。記録は、観察者の周囲で生じた A-S 行動について、生起場面、誰が、誰に向けて、注意の対象、使用した方法、注意請求の成功失敗、注意請求行動後の行動、についてメモ帳に記述した。なお、幼児が観察者に対して行なった A-S 行動についても記録した。期間中に観察された47事例を分析対象とした。

結 果

観察された47事例は、3歳児クラスの幼児で35事例、4歳児クラスの幼児で12事例であった。また、幼児に対する事例が6、先生に対する事例が6、観察者に対する事例が35であった。事例を、クラス、注意をひきつけたい対象、A-S 行動の方法、ごとに分類した (表1)。

この結果から、A-S 行動の方法が2つのパターンに分けられることが明らかになった。1つは、「みて」・「○○先生」といった発話と同時に注意をひきつけたい対象を提示する行動、あるいは注意をひきつけた対象を相手の視線の前に提示する行動パターンである。もう1つは、「みて」・「○○先

表1 A-S行動の方法、注意をひきつけたい対象、クラスごとの事例数

		注意をひきつけたい対象 に直接注意をひきつける	一度自分自身に注意をひきつけた後、注意をひきつけたい対象を示す	合計
注意をひきつけたい対象	事物	31	4	35
	動作	2	10	12
クラス	3歳児クラス	26	9	35
	4歳児クラス	7	5	12
全事例		33	14	47

生」といった発話あるいは、相手を軽く叩くような行動をとり、注意を一度自分自身にひきつけた後、注意を向けさせたい対象を示す行動パターンである。1つめのパターンは事物に注意をひきつけた際に使用する傾向がみられ、一方、2つめのパターンは自身の動作に注意をひきつけたい際に使用する傾向がみられた。

また、A-S 行動によって注意を得られたかどうかについては、観察者に対する事例をのぞく12事例のうち9事例で注意をひくことに成功していた。失敗した1つの事例では、A-S 行動後、相手から反応が得られなかったため、しばらくその場で待っていたが、注意が向くことがなかったため、移動し、他の遊びを始めた。また、他の事例では、A-S 行動の途中、他の幼児が遊び場面に参加しようとしたため、それを防ごうと行動したものであった。その他の事例として、A-S 行動を受けた相手が注意を向けているか不明だが、注意を向けない自分の動作を行なったものであった。

考 察

A-S 行動の方法に2つのパターンの違いと、それぞれのパターンで、注意をひきつけたい対象に違いが示された。このことは、幼児が、注意をひきつけたい対象に応じた A-S 行動を使い分けている可能性が示唆される。

最後に、今回の観察では観察者、つまり大人に対しての A-S 行動に事例が偏っていた。これは、A-S 行動が、もともと大人に対して多く生起する行動であるという可能性もあるが、観察者に対して以外の事例数がまだ少ないため、この可能性を主張することは難しい。そのため、ひきつづき観察を行い、今回作成した行動目録の修正を行いながら、集団保育場面で幼児が行う A-S 行動の生起パターンの特徴について明らかにすることがこれからの課題である。

引用文献

福崎淳子 (2006). 園生活における幼児の「みてて」発話-自他間の気持ちを繋ぐ機能- 相川書房.